

謹賀新年

年頭の辭

社長 岩永裕吉

聖戰第三年の春を迎へるにあたりまして、恒例によりまして社員諸君一同と共に一堂に會し、新年の喜びを分つといふことは、私の最も欣幸とする所であります。

先づ第一に、聖壽の萬歳を壽ぎ奉り、皇運の彌々隆昌ならんことを、全國民と共に心から祈ります。

續いて、目下戦線に在る我が忠勇なる將兵の勞苦に對し、深厚なる敬意を表すると同時に、今回の事變によつて仆れたる幾多の將兵、並に我々同人の戦線に赴いて、其の職に履れられた諸君を追懷して、その英靈に對し厚く敬弔の意を表したいと思ふのであります。

尙又、我社の事に就きましては、昨年中諸君が一方ならぬ努力をされ、社運が益々隆昌に赴いて來たと云ふことは、私の最も欣快とする所であります。而して來らんとする昭和十四年は

我々の將に大飛躍をなさんとす



岩永社長

勅選議員拜命

岩永本社長は客臘十二月九日附を以て貴族院議員に勅任された。岩永社長は夙に我が新聞通信界に身を投じ、多年その向上と發達とに獻身的努力を捧げ、殊に同盟通信社の成るや身心を挺して國家的使命の遂行に貢獻したる功績は頗る甚大なるものあつて今回の榮譽はまことに所以ありと爲すべきである。現今内外殊の外多事多端の折柄、我が新聞通信界の代表者として、その長く尊い經驗と、深く廣い蘊蓄とを掲げて國策審議の府に臨まらるゝことは、國家將來のために甚だ慶賀せらるべきである。

本社の新年互禮會

聖戰第三年の新春を迎へた本社では、一月元旦は恒例により社員互禮會を本社六階に於て催した。當日は午前九時半岩永社長、各常務理事以下全社員參集、同十時宮城を遙拜したる後君が代を合唱、各總、支社、局よりの祝賀電報披露、戰後將兵及び殉職同盟社員の英靈に對して黙禱を捧げ、岩永社長は別項の如く年頭の挨拶をなした。次で社長の發聲にて天皇陛下の萬歳三唱、同盟通信社の萬歳を三唱全員唱和乾盃した。次で諸富一郎君の詩吟などあり、同十時半散會した。

社員一同より祝品贈呈

岩永社長の貴族院議員就任につき社員一同は其榮譽を祝福せんが爲に本社各局次長、同總務局各部長、北京、上海兩總局長、大阪、關門、名古屋、福岡の四支社長を擧げて「社長勅選就任祝賀委員」となし、役員と共に協議の結果帝國議會堂型大理石

置時計 一個

を贈呈する事に決定し、十二月二十七日日本社に於て役員及び社員代表參列の上之が獻呈式を舉行した。社長は心からなる社員の祝品に對し感謝に堪へぬ旨の挨拶あり更に次の書面を寄せられた。

謹啓今般不肖貴族院議員拜命に付役員及社員御一同より御祝として見事なる置時計御惠贈に預り御懇情の程深く感銘仕候右は

職制一部改正

昭和十三年十二月二十八日より本社總務局に人事部を新設する事に決定、現行職制の一部を左の通り改正し同日より之を實施した。

記

- 社団法人同盟通信社職制第七條ヲ左ノ如ク改ム
- 第七條 總務局ニ左ノ各部ヲ置キ各部ニ部長ヲ置ク各部ノ事務分擔ハ社長ノ承認ヲ經テ總務局長之ヲ定ム
- 一、人事部
- 二、庶務部
- 三、經理部
- 四、業務部
- 必要ニ依リ部長ノ下ニ次長又ハ主任ヲ置クコトアルヘシ

互助會に寄贈

花房家の厚志

南支戦線に於て壯烈な殉職を遂げた故花房君の嚴父徳松氏は、去月二十二日大阪支社長を通じて故人の遺志に基き本社互助會基金中に金百圓也を寄贈せられた。互助會委員は直ちに厚志奉謝の旨花房家に挨拶するところあつた。

互助會報告 (十二分)

- △出生
 - 高壽 福(京城) 第三子男
 - 山崎 東助(英文部) 第一子男
 - 吉村 榮吉(關門) 第一子男
 - 薛田 宣敏(商況部) 第一子男
 - 横井 雄一(經濟部) 第一子男
 - 田中 喜次(映畫部) 第一子男
 - 泉 歡次(大阪) 第一子男
 - 佐藤 政一(名古屋) 第三子男
 - 角道 和三(名古屋) 第三子男
 - 村山 潔(長崎) 第二子男
- △結婚
 - 一色 茂平(大阪支社)
 - 中村 豊女(本社庶務)
- △見舞
 - 荒井宗次郎(名古屋支社)
 - 成田 周(同上)
 - 伊藤 永止(本社技術部)
 - 一ノ瀬 博(本社聯絡部)
 - 小川 靜江(本社聯絡部)
 - 淺野 誠市(本社調査部)
 - 倉田幸次郎(本社タイプ部)
- △應召
 - 市川 喜一(大阪支社)
 - 小田 忠弘(同上)
- △退社
 - 佐々木ユキ(本社外經部)
 - 黒瀬 茂子(大阪支社)
 - 齋藤喜代子(本社タイプ部)
 - 加藤 とし(本社經理部)
 - 松木 義男(高松支局)
 - 安田 成雄(福岡支社)
 - 青木みね子(大阪支社)
 - 塩見はつ子(大阪支社)
 - 本田 尙(本社商況部)
- △弔慰
 - 塚原 俊郎(政治部) 實父死亡
 - 伊藤 峯子(名古屋) 實母死亡
 - 結束武二郎(事業局) 實母死亡
 - 磯部彌太郎(釜山) 實母死亡
 - 花房末太郎(映畫部) 戰死
 - 島田 茂明(富山) 夫人死亡
 - 山上 正義(外信局) 病死
 - 吉富 正甫(北支總局) 實母死亡

新しい記事とその方向

岡村 二一

(一)
國家の全體的立場、乃至は國力推進の方向といふものを、考慮に入れずしては、一行の記事も書けなくなつた。もはや、そのことは可否の論を遙かに超えて日々の紙面に現實しつゝある。

この、急角度の轉機に臨んで、種々の意味で、最も深刻な批判の對象となり、また新しい表現技法の上で、一番苦悶しなければならなかつたのは、われわれの社會面であつた。

社會面以外の、私が直接に關與するところでない他の面に就てはこゝに論ずることを差し控へるべきではあるが、たとへば、政治經濟の面に於ては、直接、且つ絶對的な當局の行政的立場を一應遵奉することによつて、比較的イージーに、時代と併行することが出來た。殊に政治面の場合には、戰況の華々しい展開と大陸建設及び深刻化する國際問題等、外信東亞關係記事の豊富な登場によつて、往年の政黨政治華やかであつた頃の國內政治ニュースが、殆ど全く影を落めたことも、さして紙面の寂寥を感じさせなかつたところか、寧ろ却つて讀者には生々脈々たるものを與へ、その紙面効果に於て

せて、朝夕刊とも僅に全一面上を擁して、しかもあらゆる階級層を讀者に併せ持ち、それらの讀者の多くが新聞を手にするや、披見前に既に先づ何事かを期待する、その興味に必ず應答しなければならぬのである。

そこで、前記の戰線銃後の美談佳話であるが、同一類型の佳話は、如何に數多く與へられたとしても、ニュースとして再び讀者の興味を同様に期待することは出來ない。戰況であれば、同型の野戰であり、或は攻城戰であつても、その地點の戰略的乃至は政治的意味が必ず異なることによつて、常に新しい興味であり、刺戟であり昂奮であり、そして潑瀾たるニュースであり得る。太原が陥落した時の第一報も、信陽を攻略した際のそれも、殆ど全く同型の文句であつて、唯時日と地名が違ふばかりだといつて、これを非難する讀者は恐らくないであらう。政經記事の場合でも、ほとんどのことがいへる。閑談の記事はいつも軌を一にしてゐるからといつても、ニュースそのものの、價值には影響しない。

然るに、美談佳話の場合には、さうはいかないのである。「何だ、この……から始まつて、夫人との間に何男何女があると家族の名前をあげ、夫人は「かねて覺悟」と落ちついて語る、とあつて、型の如きインタビュウで終る。これは唯、お座なりの紙面の

將校の留守宅を訪問したとする。戰死の報をもたらし訪へば……から始まつて、夫人との間に何男何女があると家族の名前をあげ、夫人は「かねて覺悟」と落ちついて語る、とあつて、型の如きインタビュウで終る。これは唯、お座なりの紙面の

◆勅題「朝陽映島」



父が戰線からの片假名の手紙を持ち出して、無邪氣に讀んで聞かせてくれる。その情景を巧みに表現して、「記者はどう心を勵まして部長長の戰死を告げることが出來なくて辭去した」と結んであつた。あの記事は今も多くの讀者の胸に生きてゐるであらう。

映畫にまでなつた「チヨコロトと兵隊」も、勿論、素材に申し分はなかつたが、あれまでに感動的な記事とした表現方法の力を認めないわけにはゆかない。社會部記者の新しい苦心は、かうして着々と日々の紙面に結實しつゝあるのだ。

(二)
以上述べた社會面の新しい記事の苦心は、その他のあらゆる場合についても同様である。

そも／＼社會面が、かゝる傾向へ踏み出したのは、時代が舉國一致的の勢へ動き初めたよりも、一步を先んじてゐたのであつて、即ちそれは、往年の事件黨能、いひかへれば市井事故と犯罪關係事件のみが社會面の本格的仕事である、自他ともに觀じた時代から脱却して、科學、文化、學藝、社會事業、趣味等の部面を吸収し、更に進んで、政治經濟の大衆的消化を志すに至つた時に始まつてゐる。

事件といふものは、その大小の差異こそあれ、登場人物により、時と場所により、常に新しい刺戟と感情を伴つてくる。それは恰も戰況記事と同様で、類型的だからといつて、同時に陳腐とはいへない。従つて、日夜事件から事件をとり追ひかけて、以て社會面の能事足れりとした時代は、文章――即ち表現技法は二の次、三の次であつた。場合によつては、技法に凝ることが、却つて邪道でさへあつた。

「新聞記事は足で書け」と専らいはれたのはこのことの謂である。殺人事件の捜査本部に詰めかけて八方に飛ぶ刑事の動きをマークするだけでは足らず、進んで刑事と争つて捜査の端緒を掴まんものと、血眼の活躍を所謂敏腕記者はしたものである。全紙面を費して特報した説教強盜逮捕の大特ダネが、實はあれもない大ヨタであつた等といふ某一流紙の歴史悲劇も其處には演ぜられた。

政變風景

あわたしき
新年のお年玉
—— 本社の組閣本部陣

新聞 通信記者に
休みも正月もないとは
最早一般の通念となつ
てゐるらしいが、こんど

の政變の様に、斯う文字通り暮れ
も正月も潰されたんでは泣か
も泣けまいぢやないか。先輩の
によれば、清浦内閣の時が一月
日の政變だつた相だが、こんな
とはまづ珍らしいだらうとは云
ものゝ、そこは『感で働らき、忙
さのなかに無限の喜びを感じる
政治記者一同は、舊臘早くも『臭
いぞ！』とピンと觸覺に感ずるや
それ／＼の川先から集まる情報
デスクに山積した。

政變 來は日一日と濃化し、
舊臘廿九日の板垣陸相、木戸原相
池田藏商相の近衛首相訪問あたり
から俄然表面化した動きは、年更
まつた元日、早くも首相官邸にお
ける近衛・池田の會談となり、官
邸詰めの連中は、モーニング姿で
池田藏商相の後を追ひかけて、湖
南金澤に越年した平沼樞府議長の
宿舎まで長驅する始末、昭和十四
年の初春は屠蘇でなく政變のお年
玉に見舞はれた。

年末 から政變氣構えの手筈
全く整つた政治部は、金澤の平沼
張り込みの老練龍谷、新進太田の
兩君、興津に原田熊雄男と共に年
を越した氣鋭の泰君よりの情報、
それに各擔當方面よりの刻々の情
勢に從ひ、平沼男の歸京を俟つて
西大久保の私邸には、各社に率先
してテントが張られ、愈々政變は
本格化して來た。近衛退陣と平沼

本社の組閣本部陣

内閣出現は必至となつた。残る問
題は何日總辭職するかである。三
日深更、政府は四日初閣議を開く
との情報が入つた。初閣議は六日
の善だ。四日に繰り上げることは
おかし。四日總辭職間違ひなし
！この通信を一本ブツ放して同
夜は既に四日の曉近い午前三時過
ぎに仕事を切りあげて一同引上げ
た。四日は愈々近衛内閣退陣の日
だ。全閣僚緊張して開かれた閣議
は總辭職決行を發表、風見書記官
長からの發表は俱樂部の直通電話
を通じて政治部のデスクへ、デス
クから同報電話を以て市内各社又
地方支社、支局へ……

後繼 内閣組織の大命平沼男
に下る！ 男と共に歸京した龍谷
太田の兩君は西大久保の私邸より
男の後を追つて法相官邸の組閣本
部へ、平沼内閣の組閣本部となつ
た法相官邸には三日夜から天幕が
張られ、正面支關の眞向ひ最も地
の利を得た場所に同盟の小旗が飄
り、假設電話が架けられて、淺野
參事、田中次長が中堅組を引き具
して待機してゐる。本社デスクに
は福田部長を中心に西村次長が頑
張り、完壁の陣が張られた。四日
深更有田外相、石渡大藏次官の招
致を以て終つた組閣第一夜は明け
て五日午前八時、早くも本部天幕
陣の陣容は整えられ、平沼首相
の本部入りを始め、相次ぐ舊閣
僚、新聞僚の動靜は刻々に天幕か
らデスクへ、『荒木文相留任確定』
『木戸厚相内相へ』『前田米藏鐵相
決定！』『町田民政黨總裁返事を
留保して一具本部へ』渦巻の様な

人波に揉み苦茶にされて流石官邸
詰の猛者連も田邊新書記官長の發
表をメモにして、呼吸を切らして
飛んでくる。發表毎に、新聞僚の
名前を書いた紙片が官邸の窓から
下へ、それをうけとつて電話へ、
めまぐるしいなかにも整然たる統
制ある活動振りである。

閣僚 全部を決定して午後四
時半親任式、荻窪の近衛邸から近
衛公參内の知せが来る。スワ！
無任所相就任。親任式を終つて首
相官邸に引揚けた新閣僚の初閣議
を終つて、深更平沼首相と官邸
詰記者との初會見。深更全く仕事
を終つて、相次いで本社へ引揚げ
た一同、ビールの盃を揚げて健闘
を祝し合つた。歳末から年始へか
けて暮と正月とを吹きとばした政
變は此處に漸くその幕を閉ぢたの
であつた。(M.N.生)

スポーツ通信
井手選手の活躍
世界ラグビー界の一流に位する
瀛洲チームの中に日本人が代表選
手に選ばれた、昨年度の國際試合
に出場活躍した、ラグビー競技で
日本人が海外一流チームのメンバ
ーに選ばれたのはこれが最初の
事だ、此のニュースはシドニー支
局長豊田治助君が送信して來たも
のを運動部が得たりと許りにシド
ニー發同盟郵便で發行、各社何れ
も寫眞入りで大々的に掲載した。シ
ドニー支局長豊田治助君の社長
宛左の手紙はこれに關した消息で
ある。

當方より御送附致しましたスポ
ーツ・ニュースを郵信として御
利用下さつた事を深く喜びと致
します。
瀛洲ラグビーチームの井手選手
の實父は其の親戚等から新聞紙
上に掲載された旨通知を受けた
と大変喜んで居りました。本人
も恐ろしくこれに勇氣づけられて
將來益々活躍する事と信じてま
す。(後略)

(第二頁の續き)
どんな變化が起るか、さういふ
ことに就て、最も適切な實例をさ
がし出して表現しなければなら
ぬ。記者としての頭が、心が感情
が要求されるのは此處である。そ
して、更にそれを興味深く讀ませ
る表現技法が要る。

事件本位から一步踏み出したこ
の社會面の新傾向は、やがて動い
てきた國家の歴史的新方向に要求
され、拍車づけられて、俄然急速
なテムボをとるやうになつた。
從來は、如何に文化的要素をと
り入れるといつても、一旦大事件
ともなれば、忽ち傳統的精神は蘇
つて、社會面の全性格はあげて、
その事件に集中するの感があつ
た。その爲に起るであらうところ
の國民感情への道德的影響とか、
又は國際關係の好悪などは、全く
顧みる餘餘がなく、専ら讀者の興
味と興奮に投ずるのに汲々たる有
様であつた。

だが、國をあげての總力戦はか
ゝる無反省なセンセイヨナリズ
ムに對して、自ら白い眼を向ける
やうになつてきた。前線に苦闘す
る兵士が聞いたら、この事件をど
う思ふであらうか。かう書いたら
第三國は日本の國力を輕視しはし
ないだらうか。締切時間に追はれ
ながらも、われわれのペンは常に
かうした神經の糸に牽かれてゐな
ければならぬのである。
他の一面ではまた、ニュースに
對する價值判斷が著しく變つてき
た。戦争、大陸の新秩序、そして
國內の日常生活に強ひられる夥し
い變化——かうした歴史的重大事
の前に、從來の街の出來事は、俄
かにニュース價值を縮小され、そ
の大部分はともすれば抹消されさ
うでさへある。

こゝにもわれわれ社會面擔當者
の苦心は強ひられる。如何に時代
を認識し、如何に國家を思ふとは
いへ、そのために新聞は社會面を
國家の功利感念の露骨な表白舞臺
にすることも出来なければ、修身
の教科書とすることも許されな
い。新聞は讀者を有る讀者の最大
多數の眼に晒されるのが社會面
であつてみれば、讀者たる國民の生
活感情に發洩する興味と、纏綿た
る情緒と、聰明なる理解とを、如
何にもして提供しなければならぬ
からである。それが社會面の役割
であり、生命である。

では、われわれは何を、そして
如何に書くべきであるか。
私はさきに、市井雜事のニュー
ス價值は次第に失はれやうとして
ゐることを指摘した。併しそれは
從來の眼とペンを以てしては——
といふ但し書を前提とすることで
あつて、大きな時代の舞臺回轉の
片隅に、ともすれば見落されがち
な小さな市井の一件事も、新鮮な
感覺と新しいペンを以て表現され
たならば、案外の社會的意義をも
ち、或は讀者の時代感情に訴へる
何かあり得ることを確信するの
である。

(四)
もはや餘白を持たぬ故に、私は
要約して結論するが、われわれの
社會面は、記事の素材として、舊
來のあらゆるものを一旦は失つた
としても嘆くべきではない。新し
い眼と、新しい技法によつて、そ
れらのものは、更に再び、時代的
意義と感情と生命とをもつて蘇つ
て來るからである。來なければな
らぬのである。
舊來、未だ社會面に消化されつ
くさなかつたあらゆる部面のもの

も、また然りである。この意味に
於ては、政經、運動、外信、東亞
はいふまでもなく、全社内外のあ
らゆる部面が社會部の仕事に對し
て協力し、熱援されんことを切に
要望すると共に、新しい社會部記
事を理解し、それに興味を持つこ
とは、他のあらゆる部面の記事に
も、それ自身に光彩を添へる所以
であることを、私は固く信じて疑
はぬのである。(十二月廿五日)

故古野君嚴父書翰
肅啓先般清一郎儀死去の際に御
懇篤なる御弔詞並に御厚重なる御
供物を忝うし御厚情之段誠に感佩
之至りに不堪深く御禮申上候就て
は本日
法林院泰山清道居士
滿中陰に相當り聊か法要相當み候
に付御返禮可申上の處乍勝手故人
の遺志を酌み金子若干を國防獻金
仕り御芳情拜謝の微意に代へ申候
次第何卒御諒承の程奉願候(後略)
昭和十三年十二月十五日

二小狂會近片二
(第十五回) 炬燵 氷雨(美)
雲止まず宵宵乍ら静もりし
一人來て船戻しけり氷雨降る
凡 兒
大根の洗ひかけある水雨かな 横 行
凱旋の白衣に寒き水雨かな 蕪 蕉
お伽聞く炬燵に孫はねむりけり 東 籬
(第十六回) 忘年會、冬木立
枯れあけび黒すみ搦む冬木立 凡 兒
蒼穹に富士の立ち居り冬木立 東 籬
破れ風風に揺れ居り冬木立 凡 兒

從軍報告(其一)



「同盟のオッサン」で親しまれる同盟特派員 政治部 塚原俊郎

(江南) 江北相呼應しての武漢作戦はあらゆる點において今迄にない大掛りのものでありそれだけに從軍の秘策も各社各様に考慮され酷熱の八月から百餘日の長きに亘り興味ある報道戦が展開された。眞正面から體當りぶつつかつた我同盟は二十貫を越す豫備電池の加重も何んのその、殆んど各社の五分の一にも満たぬ小人數を以て獨特の名コムビ振りを示しつゝ山嶽に軋壕にキーの普高く各戦線に凱歌をあげたのである。同盟の強みは小さく纏つた一致團結の精神力以外何ものでもなかつた。

自分

八月下旬以來重疊した山又山に難行軍、強行軍を積み十月末武漢陥落を機として敗退の敵大軍が試みた一面退却一面抵抗の死物狂ひの踏張りを見せた粵漢線を遮断、憩ふ間もなく南進作戦に協力我荒鷲の好餌となつた粵漢鐵路を南下一瀉千里に咸寧、蒲圻を抜き遂に十一月十一日夜岳州に突入、赤地に白の同盟旗を洞庭湖畔に靡かせた。進む所常に先登にはためく同盟旗に皇軍將兵は絶對の信頼と喜を持ち「○○愛同盟のオッサン」とばかり限りなき親しみを以て接してくれた事は非常な喜びであつた。

(第一)

線にへばりついた將兵に我砲撃と爆撃は大き

な力を與へてくれるが、それにも増してニュースこそは大きな魅力となつて彼等に迫つて行く。ニュースに飢えた將兵に慈雨となつて注ぐものは四六時中休むことないオベによつて行されるされて行く同盟無線ニュースである。崩れかゝつた廢屋に、平原の獨立樹に貼り出された一片の紙に雲集して居る姿は第一線の者のみ味はへる感激であらう。戰闘間行軍間新鮮なニュースは將兵の頭の中に注ぎ込まれる。

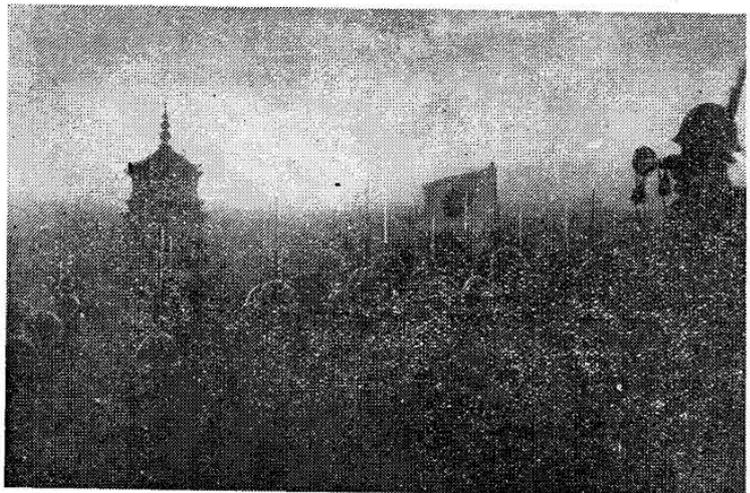
休養

の時十數里の道を遠しとせずしてやつて来てはニュースを寫して歸る部隊も少くない。そして「戦線」といふやうな立派な野戦新聞も生れて居る。ニュースと同盟——之は百萬皇軍の腦裡に深く刻み込まれて離れない。昨夏蘆溝橋畔にペンをとり今長江の最上流に立ちこの機をみて唯感慨無量だつた。

それから戦線で社友に會つた話 ▲井上君(英文部) 漢口で社報により同君の戦死を知り驚いた。九月上旬蘆山々麓で汗だらけの征衣を脱ぎながら野戦小隊長の苦心談を聞きながら聞いたのだつたが、全く夢の様だ。思へば瑞昌方面に向ふ時九江西方で別れたのが最後だつた。小さな海上トラックが長江を上る時岸邊で笑ひながら無難作にあげた擧手の姿が今でも目の前にちらついて離れない。

▲宇多君(社會部) 天晴れ名部隊長振りを發揮し部下の信望を一身に集めて居る。流石は昔とつた杵柄妙麗を上げて江北戦線を疾驅して居た。「新聞記者をやられた人は何んでも物事をバリ／＼やつてのけて胸がすくやうだ。殊に命令が簡單で要領よく特に戰闘指揮が上手い」とは兵隊さんの話。十二月上旬露營の火を圍みながら津吉君を交へ三人鼎座して東京の事など語り合つた。

▲津吉君(地方部) 京漢線の小驛花園の町外れで呼び止められたが誰だか分らぬ位焦燥しきつた津吉君を發見して驚いた。健康を害しつゝも旺盛な攻撃精神を發揮して行軍を續けて居るさまは本當に涙ぐましいものだつた。ドロップを驚掴みにして煩張つた同君にうんと元氣をつけてわかれたが唯一日早く元の元氣に復するやう祈つて止まない。とても甘いものを欲しがつて居た。



前線皇軍將兵遙か天東を拜して聖壽萬歳を祝する



沙河の彈丸

政治部 堀川武夫

(一〇〇) 廣東が陥落した十月二十一日の午後四時半、火を吐く戦車隊田中部隊のあとについて、久納部隊野原參謀の乗用車に乗つた僕と無線の小澤君——同盟南支作戦先鋒部隊が廣東一番乗りをやつた。前方は火災に包まれた市街で、パチ

したものだらう」相談してゐるところをさへ「早く！早く！」と急ぎたてられる。銃聲はだん／＼近附いて来る。戦車はもう續々後方へ退いてゐる。小澤君は機械にしがみつかりやうにしたま／＼おいつとして無言だ。火野軍曹も、佐々木君も、取り残された自動車に乗り込んで、ドアを開けたま／＼「早く！早く！」と呼んでゐる。頭の上は彈丸がビュン／＼と不気味な音を立ててゐる。遂に僕も決心して「ちやア小澤君、一先づ安全地帯に引返さう、まだ時間があるから」と言つて彈丸の降る中を泳ぐやうにして、無電機と電池を抱へ、急いで自動車に飛び乗つた。約四キロばかり後退して山田部隊のある所で降り、茲でも彈の来る崖の下でアンテナを張つた。そのうち僕も小澤君も、寒さと飢餓に迫られて来た。何しろ二十日の夕方飯盒の残り飯を食つて以來一物も咽喉を通つてゐない。そこで僕は、自動車に乗せられないで残して来た連絡員のある師團司令部に引き返して食糧とシャツを持つて来ることにして、トツプリ日の暮れた道を獨りて引き返した。

この僕らが乗り込んだ場所を正確に云へば、廣東東部沙河、廣州街道と、廣九鐵道と粵漢鐵路を連絡する單線鐵道との交叉點である。危険だからこれ以上の前進は出来ない。已むなく自動車から降りると、今度は我が飛行機の誤爆の危険が待つてゐる。みんなで日の丸の旗をふりながら、オイ／＼と叫んでやつと友軍だと言ふことを機上に知らせ、ホツとすると、今度は第一報だ。この時、こゝまで來てゐるのは、僕と日日の佐々木君だけだ。しかも日は無電機を持つて來てゐない。これは完全な同盟の獨占である。現地第一報は完全に同盟だ！ あゝ、今迄の苦勞もこの一報で酬いられる！と言ふ譯で、僕と小澤君は附近の青竹を切つてアンテナのポールとし、その上に日章旗と同盟社旗を立て、六時の連絡時刻を待つた。

(一〇〇) ところが敵はだん／＼勢を盛り返して來て田中戦車隊の危険は刻一刻と深まつていく。五時半一寸すぎだつた、戦車隊は遂に一旦その場所を引き揚げると言ふ、一緒に自動車で來た火野軍曹や佐々木君もともに引き返すと言ふ。僕は迷つた。六時の連絡を過ぎるとあとは夜になるから調子が悪くなるかも知れない、今こゝで退いては……と思つて「小澤君、如何

(一〇〇) 私はいまでも憶ひ出す、あの夕陽に焼けた沙河の丘を。そしてあの時つと頭張つてゐたら同盟の現地第一報は少し早く日本に達したであらう。とけれどやつぱりあの時の彈丸は、今憶ひ出しても怖い。



大陸建設の指標

政治部 秦 巖 夫

武漢攻略戦のあとさきに南京で送つた二ヶ月の生活は、之までの私の生涯を通じて最も感激に満ちたものであった。忠勇なる我皇軍に依つて世界戦史の上に輝かしい成果を記録した武漢三鎮の陥落は支那事變の最高峯であると共に、實に東亞の歴史の新しい出發點であることを身を以て體驗し得たのであつた。南京で維新政府の要人、新興支那の民衆再組織に献身的な奮闘を續けて居る大民會の幹部の方々と親しく接することの出来た私は武漢陥落後彼等の顔色の奥深くに心からの日支提携、反共反蔣による中國再建の熱烈な氣持を讀取ることが出来た。

全支を打つて一丸とする邦聯政府、統一中央政權樹立の運動が、期せずして各地に澎湃として起つたのも當然であつたのである。新中國誕生の基礎、東亞の新情勢の萌芽は此處に疑ふ餘地もなく立派に形成された。今後の問題は、東亞の盟主であり、新しい秩序の建設の責任者である我々日本國民が、今後如何にして、忠實に且手を

際よく此の重大な使命を達成し得るか否かに懸つて居る。私は此處に維新政府行政院長梁鴻志氏の言葉を借り、大陸建設の指標として強調したい。梁氏は十一月下旬日本訪問の旅を終へて南京に歸つた後、彼の感想を次の言葉で結んだ。『中國は過去百年の長い間日本を知らず、日本人を知らず、歐米を崇拜し、歐米の産業文化を見習ひ、歐米人と一緒に仕事をして来た。今度の事變で日本が如何に強く、優れた國民であるかを心から知ることが出来たが、此の事を全民衆に徹底させ、日本人と一緒に東洋の新しい政治建設をやりに、日本人と一緒に事業を起して、日滿支經濟ブロックの強化に進む爲には、日本人が中國人の氣質を知り、中國民衆の氣持を歐米から日本に向け換へさせることが最も大切である。日本人が眞に中國人の氣持を呑込んで呉れるならば、日支の經濟提携の如き極めて速かにその目的を達成させることが出来るやう。』



支那の兵士と士民

社會部 黑澤 俊雄

從軍から歸つて來ると定つて聞かれる問題は「支那軍は強いが弱い」か「支那人の對日感情の眞相」の二つ。正面切つた觀察は三月や四月支那に居た所で到底出来るものでないから、解答代りに僕がかういふ人達に話す二つ三つのエピソードをここに記して見よう。元よりこれで全般を推しては困る。

一喝を喰はずと捕虜先生眼をむいて「何捕虜？一體貴様どの軍隊だ」と來た。今度は通譯先生の方がたじ／＼となつて「日本軍だ」と答へると、「そうか、貴様等が日本軍か、それや戦争しなげりやならん」と云ふなり大變な勢であられ出す。漸く鎮めていろ／＼訊問すると、此の勇敢なる捕虜は雲南地方からの徵發兵と判つた。南北五十里も距ると土語が相互に通じない支那のことだから、この兵士も遙々雲南から徵發されたもので、自分の隊内でも碌々話は通ぜず、日本軍に捕つたときもどこか廣東の友軍にでも紛れ込んだと思ひ込んでゐた。顔と服装位では廣東兵と日本兵の區別などつきやうがないと濟ましてゐた。

△「清軍來」を歓迎する農民 大別山方面へ從軍した君から又聞き。山嶽内の一寒村へ某部隊が入ると部落民が皆辮髪を蓄へてゐる。支那でもこんな所は近頃珍らしいと思つて入つて行くと、家ごと例の龍の繪を畫いた舊清朝旗をヒラ／＼翻へして部落民總出でお茶の接待だ。どうも我軍歓迎の意味らしいので些か面喰つて事情を聞くとお百姓さん達とんでもない感涙ひをしてゐたことが判つた。我軍が入る少し前から此の地方一帯に、清朝が復活して南方の蔣介石革命軍は再び破られ南の方へ逃げ込んだといふ噂が傳はつてゐたのだ。蔣の新生活運動が數年も前から全國を風靡してゐる御時世に、未だに辮髪も切られず、置き忘れられてゐた僻村のことだから、たんの底には未だ清朝旗も藏つてあつたのたうら。それが、どうやら北の方から見慣れない軍隊が進んで來たのでそれやこそ「清軍來」とばかり龍の旗ヒラ／＼となつた次第。通譯が我々は日本軍だといひ聞かすとどちからでも同じだといふ顔で相變らずニコ／＼お茶を汲んでくれたさうだ。

さつぱり判らぬ状態だつた。その日も夕方の七時半過ぎ高雄の吉野氏(臺灣日報高雄支局長)から「飛行艇が不意に飛んで來た、原稿は七時の汽車に積込んだ」と至急電話があつた。高雄を七時に出る汽車は中部の彰化止りで十二時に着て明朝五時までに支局へ歸らぬと内航航空便に間に合はない。『確かに寫眞第一報だ、飛ばせろ』支局長の言一下シボレーが社旗を立て、勢ひ物凄く臺灣縱貫道路を南下し始めた。凡そ一時間も走つたらうか、急に車が地響きを立て、停つた。エンジンのシャフトが熱で膨脹して動かなくなつたのだ。こんな故障は十年に一度もないので「うが」と運轉手が泣き出しさうに言ふ、無暗と腹が立つが支局に聯絡する方法とてない。焦燥の十分、後から來たトラックに便來して新竹驛に馳け込んだ。助役さんの好意で支局へ通知する一方運轉手に一毫見つけて來いと命ずる、小一時間経つてやつと現れた車はボロボロ、ボデー諸ともに軋り出すガタフォードだ。まよと飛び來つて全速力を出したがる途端に、一時彰化驛に辿りついた途端に『御社の原稿は先刻臺北から電話がかかりこちらの自動車に持たせてやりました』と驛員が氣の毒さうに言ふ、明方社に歸ると寫眞は彰化で仕立てた車を途中まで迎へて歸つて來た。

録音放送

南支報道戦線の裏舞台

臺北支局 吉田哲次郎

A 南支作戦第一報 十月十二日 明けやらぬ朝の窓から時折そよ風がはいるが南國の十月はまだ暑い、第一回の聯絡は應答なし、二瓶御大は二つ並べた藤椅子に毛布にくるまつてまどろんでゐる、やがて朝の香が亭仔脚に漂つて人の足音が聞える、夜來の雨も霽れて檳榔の梢から夜が明け始めた。第二回の聯絡時刻だ、キイが躍動して整流球が點滅する、靜かに極く僅かづゝダイヤルが廻る。上陸は今日ではないのかと不安の瞬間二瓶御大の横顔がサツト緊張する、十秒、二十秒、出たぞ！ 聞えるぞ！ 弱いが高い金屬性の電波の音が受信機の底から臺北を呼んでゐる。聯絡はとれた、バイアス灣の小波を蹴たて臺灣海峡の怒濤を越えて今、同盟の無電は南支の海を制壓したのだ。他社の絶対追隨し得ない同盟の獨壇場、壓倒的な勝利だ。『大本營陸軍報道部發表、南支派遣軍は十二日午前四時頃廣東省の一角〇〇灣に月明下敵前上陸を敢行し見事成功せり』これぞ南支作戦軍が敵の意表を衝く上陸成功を銃後國民に傳へる第一報だ。ウナが本社に飛ぶ、時に十月十二日午前七時十分！

B 寫眞第一戰 十月十五日 バイアス灣上陸後の寫眞や映畫はいつどこにどんな方法で着くか

のまゝ飛行場へ持ち込んでやつと間に合つたとのこと、『よかつた』『よかつた』と支局長と三人朝の冷い編輯室に喜びの聲を擧げた。これが寫眞第一戰の歴史的な勝利を内地の鈴の音に傳へたのである。 〇 臺北廣東空の一番乗り 十月二十五日 臺北から増城占領寫眞を内地へ齎して停動を建てた今はなき同盟第一號機が再び臺北へ來た時のことである。夕食に十幾杯か喰つて獲原君(本社發信部)をおつたまげさせた細川操縦士と上野機關士はこの二日間を徒らにハリきつて待機してゐた。二十四日午後三時十五分「白雲飛行場が着陸出來るやうになつた。滑走路は二千メートル」續いて二十五分「許可あり手配頼む」と前線からのバタダ、それと全員緊張準備にかゝつたが臺南に同盟機用のガソリンがないといふ、あれやこれやと夜つびて交渉のつゞまりは支局長の斡旋で〇〇から分與してもらふことに話が廻つた。地上聯絡には中川君が急行し準備は完了した。翌二十五日早朝臺北飛行場を準のやうに南に飛立ち、間もなく臺南發の報が入つたが、その後三時になり四時になつても前線から到着の知らせが來ない、もしやと恐ろしい萬一の不安が胸に波立つ。後で判つたことだが特派員一同餘りの嬉しさにガソリン探しや修理應援に狂奔して飛行場と廣東基地との聯絡が杜絶されたことによつたものらしい。かくて同盟機は銀翼に幾多の冒險とスリルを載せ皇軍廣東入城の各社寫眞原稿を積んで臺北廣東一千キロの新ルートを開拓、南支の空を征服して午後六時二十五分無事臺北の夕燒にその雄姿を輝かせて歸つて來た。

同盟人事

△辭令

中南支總局臨時在勤 久我豐雄 (外信局外信部長)

莫斯利支局長ヲ命ス (十二月十五日附)

北支總局寫眞部長 不動 健治

北支總局寫眞部長 (十二月廿日附)

外信局外信部長 岩本 清

外信局東亞部長 橫田 實

北支及中南支方面(出張ヲ命ス (十二月十九日附、各通))

事業局出版部 坂口 榮

事業局出版部 廣田 實

事業局寫眞部 林十水而樂生

勤務社員 大木 寬

勤務社員 大瀧 鹿次

勤務社員 中井延次郎

勤務社員 高崎 修

勤務社員 田島 義夫

勤務社員 木村 勇雄

勤務社員 樋口 憲吉

勤務社員 安武 誠一

勤務社員 相澤 義信

勤務社員 依岡健一郎

勤務社員 依岡健一郎

勝下 虎彦

北支總局勤務ヲ命ス (十二月六日附、各通)

北支總局勤務社員 依岡健一郎

天津支局駐在ヲ命ス (十二月廿日附)

中南支總局 奧宮 正澄

華文部長 大星 石松

杭州支局長 荒木秀三郎

南京支局兼務ヲ命ス (十二月廿日附、各通)

事業局映畫部 坂田 二郎

勤務社員 井關 納

勤務社員 石川 元吉

勤務社員 樋口 憲吉

勤務社員 玉井平太郎

勤務社員 勝田 丙吉

勤務社員 鹿兒島支局勤務ヲ命ス (十二月一日附、各通)

中南支總局勤務 松尾 正巳

勤務社員 (香港支局在勤)

勤務社員 大瀧 鹿次

勤務社員 栗林 農夫

勤務社員 依岡健一郎

勤務社員 依岡健一郎

勤務社員 依岡健一郎

勤務社員 依岡健一郎

勤務社員 依岡健一郎

南支方面出張中

勤務社員 高雄 辰馬

勤務社員 福澤 延一

勤務社員 山本 守

勤務社員 小山 武夫

勤務社員 二瓶 邦男

勤務社員 富田 俊雄

勤務社員 櫻谷 四郎

勤務社員 富岡 康子

勤務社員 宮崎 司

勤務社員 井生 武夫

勤務社員 菊川新太郎

勤務社員 牟田 喜八

勤務社員 梶浦 子郎

勤務社員 明石 正彦

勤務社員 依岡健一郎

高橋信一郎

川端 福一

高松支局 松木 義男

休職期間滿了ニ付解職 (十二月九日附)

事業局映畫部次長 (廣東方面出張中) 花房末太郎

勤務社員 山上 正義

勤務社員 首藤 恒

勤務社員 山田 直輔

鈴木幸次郎

中村 靜子

野村 俊雄

南支方面出張中

内本 誠止

小山 雅夫

編輯後記

聖戰第三年の新春を恙なく迎へ得たことは洵に御同慶に堪えない。茲に謹んで、聖壽の萬歳を祝ぎ奉り、また同盟社の重要な使命に鑑みその將來を祝福したい。

同盟通信社報

故花房君社葬

十六日青山齋場に於て



南支戦線に從軍 中名譽の戦死を遂げた同盟通信社映 畫部次長故花房末 太郎君の珠江上に於ける勇猛果 敢なる行動は前號記載の通りであ る。本社は社葬を以て之を禮す るとなり、十六日午後零時半から 事青山齋場に陸軍三長官、永井 遼相(各代理)貴衆兩院議員、各新聞 社、外國新聞通信社代表等並に岩 永社長以下全社員參列の下に佛式 により執行された。午前十一時半 靈柩は嚴父德松氏、母堂ヤエさん 令兄龜五郎、同信次郎氏等遺族を はじめ岩永社長、社員等に衛られ て社員告別裡に本社を出發、同 十一時五十分青山齋場に到着、靈 前には近衛首相以下各閣僚、陸軍 三長官、各新聞社はじめ各方面か ら贈られた花輪が飾られ午後零時 半閉式、散華のち岩永社長、永 井遼相(代理)及社員總代折橋映畫 部長其他の弔辭朗讀あり、南支方 面最高指揮官安藤中將を始め各方 面からの弔電披露があり導師本法 寺藤原聖宣師の燒香、讀經に續い て岩永社長、遺族來賓、社員等の 燒香があり、引續き二時半まで一 般告別式を行つたが參會者多數あ

り盛儀であつた。なほ英靈は十七 日午後九時四十分東京驛發遺族に 護られて郷里大阪に向つた。

岩永社長弔詞
映畫部次長花房末太郎君、英才ヲ懷イテ遂ニ戦線ノ華ト散ル。抑々通信報道ノ任ハ重ク、之ニ從フ者ハ常ニ死生ヲ遠觀シテ勉ムルコト、恰モ我が忠勇ナル將兵ガ外國ノタメ笑ツテ一身ヲ獻ゲ、從容死地ニ就クト選ブトコトナシ。併モナリ想ハザリキ君ガ壯烈ナル殉職ヲ遂ゲテ、我社戰死功勞者第五人ノ列ニ入ラントハ。

折橋部長弔詞
悲風蕭々トシテ天地ニ溢レ、哀切痛苦胸膈ヲ打ツ。謹シテ今盟友花房末太郎君ノ靈ヲ送ルニ當リ、惜別ノ情ニ塔ヘズ、追懷ノ誠ヲ捧ゲテ敬弔ノ衷情ヲ披瀝ス。

君ハ昨夏北支ニ戰雲動イテ東亞ノ形勢危急ヲ告グルノ時、ソノ英才ノ故ヲ以テ選バレテ戦線ニ赴キ、爾來一年有餘、身命ヲ賭シテ報道ノ大任ヲ果シ、支那ノ陸ノ南北ニ馳驅シテ奮サニ皇軍活躍ノ狀況ヲ統後ニ傳ヘテ餘サズ。即チ北支南口ノ戰ヨリ太原

ンデ廣東攻略ノ軍ニ從ヒ、仔細ニ之ヲ傳ヘテ統後ヲ感激セシメ、廣東入城ニ續イテ頑敵掃蕩ノ戰陣ヲ巡リ、十一月三十日遂ニ西江ニ散ル。想ヘバ激戦ノ在ルトコロ君ノ英姿颯爽トシテ之ニ從ヒ、豪勇將兵ニ劣ラズ、而モ沈着時ニ應ジテ適切機敏ノ行ヲ致シ、酷寒嚴冬ノ水ヲ割リ決潰黃河河畔ニ酒々タル濁流ヲ横切り、炎熱鐵ヲ溶カス大地ニ伏シ、轉戦南北一 年有餘、報道戰士トシテノ不滅ノ榮譽ヲ擔ヒ從軍特派員ノ華ト仰ガル。其間温順ヨク同僚後輩ヲ指導シテ敬慕ヲ蒐ム。特ニソノ最後ニ至ツテハ凄絶鬼神ヲ哭カシム。報道戦線ノ精華ニシテ感嘆ノ情ヲ極メタル、即チ雨飛スル彈丸ニ身ヲ曝シテ敢然艦上ニ立ツ時、敵彈來ツテ君ヲ激流ニ沈ム。君而モ尙報道ノ任重シト死ニ臨ンデ愛機ヲ水上高ク捧

歲末部長會議

議事要録

本社各部長會議は十二月二十一日午後三時半開會、岩永社長、各常務理事以下各局長、各部長出席、左記諸件を議決して同五時半散會した。

議事

- 一、自動車配車に關する件
石部經理部長より日東自動車との交渉経過報告あり、編輯各部に交際なく配車可能の見込なる由にて、今後の交渉も同部長に一任と決す
- 一、新年新聞休刊の件
東京各紙休日決定に就き報告あり、各部とも例年通り對策を整へること
- 一、編輯室換氣の件
内勤員の健康保全の爲左記の通り定時同盟各階の窓を開放する事とす
- 一、積立金問題
(慶申金問題委員に併託)
- 一、社内掲示板設置の件
- 一、委員 藤田、岡村、福田、石部、大川、小松、横田、秋山(慶岡村)
- 一、消費組合の件 委員附託
- 一、委員 福田、石部、倉田、小松、大川)
- 一、社員相互間の慶弔金問題 委員附託
- 一、委員 藤田、岡村、福田、石部)

花房家告別式

花房家告別式は十二月二十六日午後一時より大阪府布衣市小坂小学校講堂に於て執行、同地方官民より贈られたる花輪は場内を埋め多數の燒香者ありて極めて嚴肅な盛儀であつた。

ハレズ。陸海軍當局ノ熱心ナル水底捜査ハ前後三日ニ及ベルモ遂ニ君ノ姿ヲ求メ得ザリシハ、社内全員萬斛ノ恨ヲ吞ムトコロナリ。惟フニ君ハ責任寡黙恭儉ニシテ實行力ニ富ミ、社内ノ囑望ヲ聚ム。而シテ今君ハソノ實行力ニ斃レテ春秋ヲ喪フ。洵ニ壯烈悲愴ノ極ト言フベシ。社内學ツテ哀悼スル所以ナリ。然リト雖モ君ガ英靈ハ永久ニ我社ノ支柱トナリ、同盟精神ノ鼓舞ニ卓功ヲ始スベキハ、余ノ固ク信ジテ疑ハザルトコロナリ。本日社葬ノ禮ヲ以テ境ヲ飾リ、奠ヲ厚クシテ君ガ靈ヲ送ル。冀クハ彷彿トシテ來リ襲ケヨ。



ハレズ。陸海軍當局ノ熱心ナル水底捜査ハ前後三日ニ及ベルモ遂ニ君ノ姿ヲ求メ得ザリシハ、社内全員萬斛ノ恨ヲ吞ムトコロナリ。惟フニ君ハ責任寡黙恭儉ニシテ實行力ニ富ミ、社内ノ囑望ヲ聚ム。而シテ今君ハソノ實行力ニ斃レテ春秋ヲ喪フ。洵ニ壯烈悲愴ノ極ト言フベシ。社内學ツテ哀悼スル所以ナリ。然リト雖モ君ガ英靈ハ永久ニ我社ノ支柱トナリ、同盟精神ノ鼓舞ニ卓功ヲ始スベキハ、余ノ固ク信ジテ疑ハザルトコロナリ。本日社葬ノ禮ヲ以テ境ヲ飾リ、奠ヲ厚クシテ君ガ靈ヲ送ル。冀クハ彷彿トシテ來リ襲ケヨ。

ハ全世界ニ我聖戰ヲ理解セシメルニ寄與ス。秋初南支作戦行動始マルヤ、君ハマタ選バレテパイアス灣ニ敵前上陸、炎暑ノ下アラユル困難ヲ排シテ各地ニ轉戦シ、君ガ戰死ノ當日タル十一月三十日ニハ廣東省九水最前線ノ戦況撮影ノタメ海軍砲艇ニ便乗シ珠江ヲ下ル途次、陸岸敵兵ノ攻撃ヲ受ク。砲艇ノ將兵ガ應戦之ヲ擊滅スルノ情景撮影中、君ハ身ニ敵彈ヲ受ケテ戦傷、激流中ニ墮落

救助ニツトメ、僚友及乗員ハ大聲叱呼、撮影器ヲ手離サントコトヲ勸メシモ、君ハ之ヲ護リ捧グテ湖水中ニ浮沈ス。砲艇ハ漸ク君ニ近ヅキ櫂ヲ仰ベテ救助成ラントスル刹那、嗚呼ハ苦痛ト疲勞ノ極カ水面下ニ没シテ再ビ現

同盟人事

北支總局勤務社員 花房末太郎
 事業局映畫部次長ヲ命ス(十一月廿九日附)
 外信局東亞部 松代 岡次
 勤務社員
 漢口支局長ヲ命ス
 外信局東亞部 牛島 俊作
 勤務社員
 廣東支局長ヲ命ス(十一月十七日附各通)
 内信局整理部 岡崎 龜市
 勤務社員
 内信局社會部勤務ヲ命ス(十一月一日附)
 中南支總局 荒木秀三郎
 勤務社員
 事業局映畫部勤務ヲ命ス(十一月十一日附)
 中南支總局 坂田 二郎
 勤務社員
 内信局政治部勤務ヲ命ス(十一月廿二日附)
 中南支總局 須藤宣之助
 勤務社員

外信局東亞部勤務ヲ命ス(十一月廿六日附)
 中南支總局 前田 廉
 勤務社員
 北支總局勤務ヲ命ス(十一月十九日附)
 事業局調查部 鈴木 大
 勤務准社員
 事業局出版部勤務ヲ命ス(十月三十一日附)
 事業局調查部 原田 昌一
 勤務准社員
 事業局出版部勤務ヲ命ス(十一月一日附)
 聯絡局規畫部 小澤 武二
 勤務准社員
 中南支總局勤務ヲ命ス(十一月廿一日附)
 南支方面出張中
 (聯絡局規畫部) 菱田 和男
 (勤務社員)
 本社(歸還ヲ命ス(十一月十日附)
 中南支總局出張中
 (外信局英文部) 村山 謙
 (勤務社員)
 本社(歸還ヲ命ス(十一月十一日附)

中南支總局臨時在勤
 (聯絡局規畫部) 吉井 政司
 (勤務社員) 菊地 義紀
 本社(歸還ヲ命ス(十一月廿五日附各通)
 廈門方面出張中
 (内信局政治部) 新井 正義
 (勤務社員)
 本社(歸還ヲ命ス(十一月廿九日附)
 附)
 社員ヲ命ス 齋藤 義明
 大阪支社勤務ヲ命ス 大川 伴藏
 准社員ヲ命ス 横濱支局勤務ヲ命ス(十一月一日附各通)
 准社員ヲ命ス 達 泰忠
 社員試用、大阪支社勤務ヲ命ス(十一月廿一日附)
 社員試用、福岡支社勤務ヲ命ス 沖本 薫
 加藤 隆

(十一月廿八日附各通)
 村上 貞子
 社員試用、札幌支局勤務ヲ命ス(十一月十九日附)
 菊地 澄子
 准社員試用、經濟局外經部勤務ヲ命ス(十一月十一日附)
 高山 泰子
 准社員試用、内信局タイプ部勤務ヲ命ス(十一月十五日附)
 菊田 マサ
 准社員試用、經濟局外經部勤務ヲ命ス(十一月廿九日附)
 鶴林 ナヲ
 准社員試用、中南支總局勤務ヲ命ス(十一月一日附)
 岡 久雄
 准社員試用、福岡支社勤務ヲ命ス(十一月廿八日附)
 北支總局勤務 國吉 武夫
 社員試用 田島 義夫
 小出 久
 同 西岡 正一

中南支總局勤務 小掠 廣勝
 社員試用 青森支局勤務 八田 入善
 社員試用 廣島支局勤務 加藤 正一
 京城支局勤務 熊谷 正巳
 社員ヲ命ス(十一月一日附各通)
 北支總局勤務 長内 敏榮
 准社員試用 中村 萬里
 同 皆吉 彰人
 同 鶴見 安
 同 横山 潔
 同 渡邊 文子
 中南支總局勤務 栗原 花子
 准社員試用 横山 静枝
 同 堀口 英一
 同 原 かね
 准社員試用 神戶支局勤務 相川 初枝
 同 准社員試用 氏家喜代子
 准社員ヲ命ス(十一月一日附各通)

北支總局ノ事務ヲ囑託ス(十一月二十日附)
 ポストン通信員 嘉納 履方
 紐育支局ノ事務ヲ囑託ス(十一月廿二日附)
 聯絡局聯絡部長 古野清一郎
 死亡(十一月十一日)
 神戶支局勤務 中尾とし子
 准社員 新川 敏子
 依願解職(十月卅一日附各通)
 經濟局外經部 鈴木すずみ
 勤務准社員
 依願解職(十一月十五日附)
 福岡支社勤務社員 安田 成雄
 依願解職(十一月廿八日附)
 外信局外信部 鈴木 孝
 勤務社員
 依願解職(十一月三十日附)
 中南支總局出張中
 (大阪支社) 青木元一郎
 (高員部長)
 中南支總局臨時在勤
 (内信局政治部) 秦 巖夫
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (聯絡局規畫部) 黒澤 俊雄
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (勤務社員) 近藤 精教
 臺北支局出張中 荻原 榮治
 本社(歸還ヲ命ス(十二月一日附各通)
 中南支總局臨時在勤
 (内信局政治部) 塚原 俊郎
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 淺井 達三
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 潤田三代治
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 一色 義忠
 (勤務社員)

山上正義君逝く



本社モスクワ支局長として出發前にあつた山上正義君は、去る二日痔疾治療のためお茶の水順天堂病院に入院加療中十日胃潰瘍に罹り、と子夫人其他近親者の手厚い看護を受けてゐたが、偶々腹膜炎を併發し、薬石の効もなく四十三歳を最期として十五日午前二時三十分遂に長逝した。まことに哀惜長恨に堪へぬところである。
 君は鹿兒島市清水町に生れ、鹿兒島高農校を卒へて農商務省に入り役人生活に入つたが、君の潑々たる朝氣は遂に役人の生活に満足するを得ず新聞界に轉じて先づ東京

青山齋場にて葬儀施行

京毎夕新聞の記者となり、次で上海日日新聞に轉じたことが君をして今日の有數な支那通たらしむるの第一歩を與へたのである。かくて大正十四年新聞聯合社の前身たる東方通信社に入り廣東支局長となり、其後新聞聯合社、同盟通信社に勤務せる間、香港、南京、北京の各支局長を歴任、昭和十一年一月本社東亞部次長、同十一年十月發信部長となり、更に十三年六月モスクワ支局長に任ぜられて、ピザを待つこと六ヶ月にしていよいよ出發といふ時になつて假初の病が遂に君の歸を奪ふこととなつたのである。支那評論並に隨筆など多數の遺筆はひとり君の昔日の面影を物語る。
 故山上君の遺骸は十二月十五日早朝府下吉祥寺町一三二六の自宅に移され未亡人とし子さん、長男晃一君を始め親族友人など多數のしめやかな御通夜があり、十七日午後一時より青山齋場に於て神式により嚴肅なる葬儀が行はれた。風見内閣書記官長、横溝内閣情報部長、河相外務省情報部長、光永電通社長並に岩永同盟社長、各常務理事其他多數の花輪が供へられ、神官の修祓、祝詞奏上に次で岩永社長、堀外信局長の弔詞、友人總代横田實君の切々胸に迫る弔詞に引續き玉串奉奠が行はれたが、今年五歳の喪主晃一君が未亡人に手を取られて靈前にぬかづく可憐の姿は一入參列者の目に悲しみを與へた。かくて順次玉串を奉奠し、一般告別式に移りて

葬儀

同二時半嚴肅なる葬儀は終つた。岩永社長の弔詞左の如し。
 山上正義君、通信報國ノ確固タル信念ヲ具ニスル同志ノ一人シテ私ハ多年君ヲ信頼シ期待シテ來タノ多ク君ノ信賴ノ情ヲ陳ルルガアラウトハ夢ニモ思ハナカク。新聞聯合社ノ前身タル東方通信社ニ君ガ入社シテハ大正十四年ノ九月ダツタ、爾來實ニ十有餘年、君ハ新聞聯合社ノ經テ同盟通信社(勸新開拓ガ忠實ニシテ剛毅ナル君ノ才幹ト卓越セル君ノ識見ハ、社業達成ノ上ニ當リ大キナ力ヲアツタ。特ニ出デテハ廣東、香港、南京ノ各支局長タリ、入ツテハ東亞部次長、發信部長ニ歷任シテ君ガ我が國ヲナラシムルニ殘ラズ足跡ハ巨大デアツタ。今ヤ東洋安定ノ聖ナル軍ハ進ミ、アジアノ新秩序ハ着々トシテ具現セントシツ、アル時、有數ノ支那

通シテ自他トモニ許シテキタ君ヲ喪ツタコトハ獨リ我が同盟通信社ノ痛恨デアルニ止マラズ、現下ノ日本ニトツテモ抄ナカク損失デアラルコトヲ思フ。更ニ惜ムベキハ君モスクワ支局長ノ重任ヲ帶ビテ既ニ萬端ノ準備成リ勇躍赴任ノ直前ニアツタコトデアル。ソノ壯行ヲ祝シテ社友ガ會シタトキ、君ハ明快ニ言ツタ「僕ハ飽迄同盟ノ記者トシテモノヲ聴キ、モノヲ見テ來ルコトヲ約束シマス。」ト。ソノ言ヤ寸鐵ヨク高キ所信ヲ言外ニコメテ私共ノ感動サセタコトデアツタ。思ヒ去リ思ヒ來ツテ悲シキ君ノ追憶ハキリマラズ知ラナイガ、空シキ哀感ニフルケルノミガ君ノ道ヲ道デアアルマ。私ハ多數ノ同僚社員ト共ニ更ニ勵マシ合ツテ君ガ終生ノ務持トシタコト報知報國ノ聖業ニ新トナル勇氣ヲ鼓シテ邁進セシメテ、故ニ堅ク誓ヒ以テ決別ノ詞トスル、希クバ君ガ靈來リテ嚮ケ給へ。

中南支總局臨時在勤
 (内信局政治部) 飼手 譽四
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (勤務社員) 黒澤 俊雄
 中南支總局臨時在勤
 (聯絡局規畫部) 近藤 精教
 (勤務社員)
 臺北支局出張中 荻原 榮治
 本社(歸還ヲ命ス(十二月一日附各通)
 中南支總局臨時在勤
 (内信局政治部) 塚原 俊郎
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 淺井 達三
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 潤田三代治
 (勤務社員)
 中南支總局臨時在勤
 (事業局映畫部) 一色 義忠
 (勤務社員)